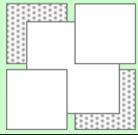


第1部 まちの現状

まちの現状



まちの現状

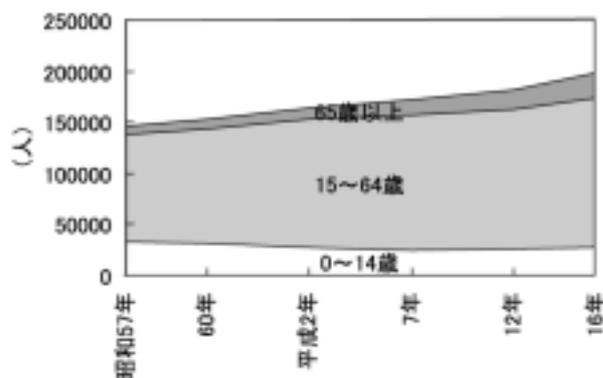
1 高津区の変遷

- ・高津区は本市のほぼ中央に位置し、多摩川沿いの平たん地と多摩丘陵の東端部にあたる丘陵地で形成されています。
- ・江戸時代から二子の渡しを中心に、大山街道沿いの二子から溝口にかけて発達してきました。丘陵部には社寺が点在しており、その周辺には農村地帯が広がっていました。
- ・大正 14（1925）年の二子橋の架設、昭和 2（1927）年の玉川電気鉄道（現在の東急田園都市線）の溝口駅への乗り入れと南武鉄道の開通を契機に市街化が進みました。
- ・昭和初期には軍需産業の進展に伴い、武蔵溝ノ口駅周辺に精密機械や自動車部品などの工場の進出が目立ち始めました。同時に、勤労者向けの住宅開発が進み市街化が加速しました。第二次大戦中も戦況の悪化に伴う疎開者の流入もあり、都市化の傾向は続きました。
- ・第二次大戦後は、東京への通勤圏として渋谷に鉄道で直結する立地条件から住宅の需要が大きく、大規模な土地区画整理事業により大規模住宅団地の開発が進みました。同時に、東急田園都市線の鷺沼駅以西への延伸や第三京浜道路、東名高速道路の開通など、急激な都市化を支える都市基盤の整備が進められてきました。
- ・高度経済成長期の住宅中心の市街化に続いて、昭和 54（1979）年に市民プラザ、平成元（1989）年にかながわサイエンスパークがオープンし、さらに溝口駅周辺では、平成 9（1997）年に再開発により大型商業施設が立地するなど、高津区を中心とする市街地となってきました。

2 人口動態

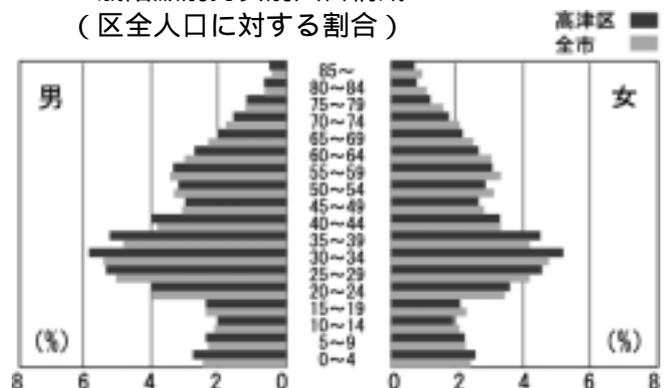
- ・高津区が宮前区と区分した昭和 57（1982）年には約 146,500 人であった人口は、増加を続け、平成 17（2005）年には約 201,700 人となっています。
- ・年齢別の人口構成をみると、全市平均と比べ 20 歳から 45 歳未満の人口割合が高くなっており、労働力人口が多いという特徴があります。
- ・町丁別の人口増減率をみると、一部地域を除き全体的に人口の増加傾向にあります。

人口推移（年齢 3 区分別）



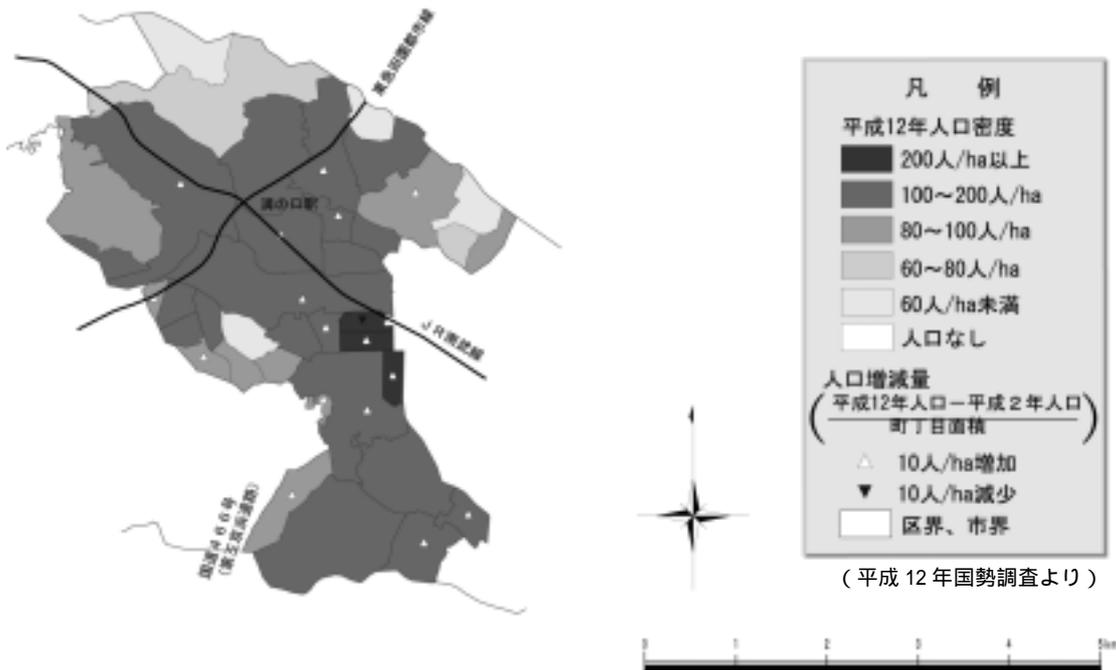
（平成 16 年川崎市統計書より）

5 歳階級別男女別人口構成
（区全人口に対する割合）



（平成 16 年川崎市統計調査より）

町丁別人口密度 + 増減図

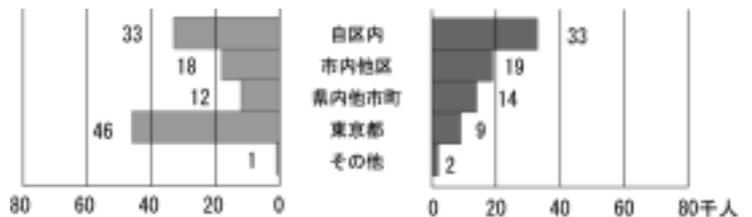


3 高津区の産業

- 高津区の就業状況を見ると、区内に居住する従業者及び通学者約110,000人のうち、就業先や通学先が区内にある人は約33,000人、区外にある人は約77,000人となっており、区外に通勤通学する人が多く、特に東京都に就業先や通学先がある人が多くなっています。一方で、区内に就業先や通学先がある約77,000人のうち、区外からやって来る人が約44,000人となっており、区内に居住する人より多くなっています。その中でも、市内他区からやって来る人が多くなっています。
- 産業大分類別就業者数の割合をみると、区内ではサービス業、卸売・小売業・飲食店、製造業が高くなっています。全市平均と比べると製造業の割合が特に高くなっています。

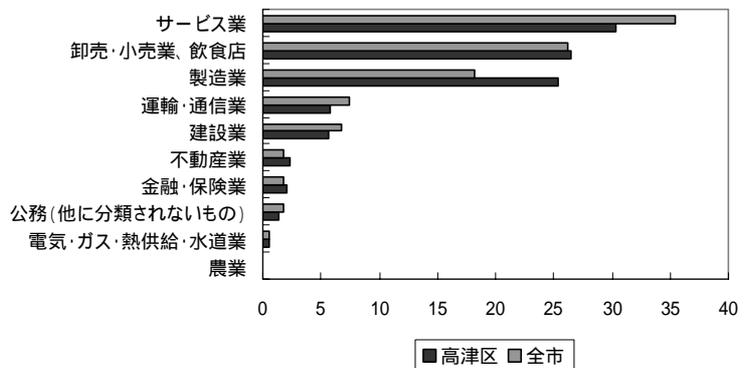
区内に常住する従業者・通学者の従業・通学地別の人数 = 110,000人

区内での従業者・通学者の常住地別の人数 = 77,000人



(平成12年国勢調査より)

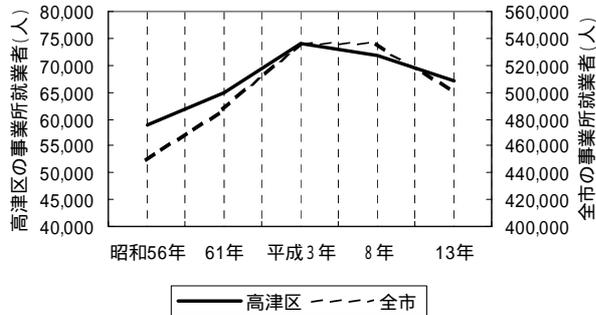
産業大分類別就業者数の割合



(平成13年事業所・企業統計調査より)

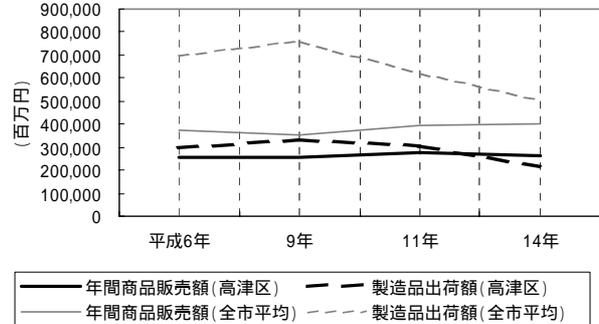
- ・事業所従業者数は、平成 3（1991）年以降減少傾向にあり、平成 13（2001）年には約 67,000 人となっており、全市の約 13%を占めています。
- ・年間商品販売額は、平成 6（1994）年以降横ばい状態で推移しており、平成 14（2002）年には約 2,660 億円となっています。製造品出荷額は、全市平均と同様に平成 9（1997）年以降減少傾向にあり、平成 14（2002）年には年間商品販売額を下回る約 2,170 億円となっています。

区内事業所従業者数の推移



(平成 13 年事業所統計調査より)

年間商品販売額と製造品出荷額の推移

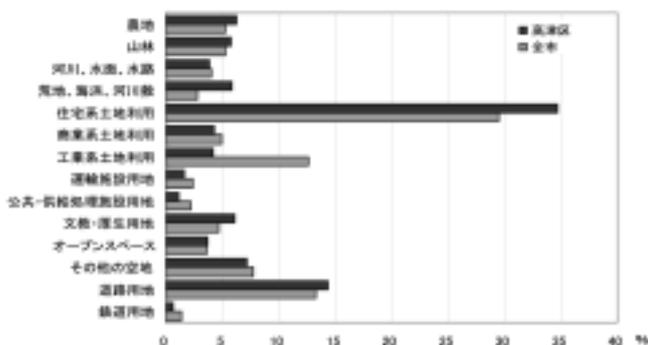


(商業統計調査及び工業統計調査より)

4 土地利用からみる高津区

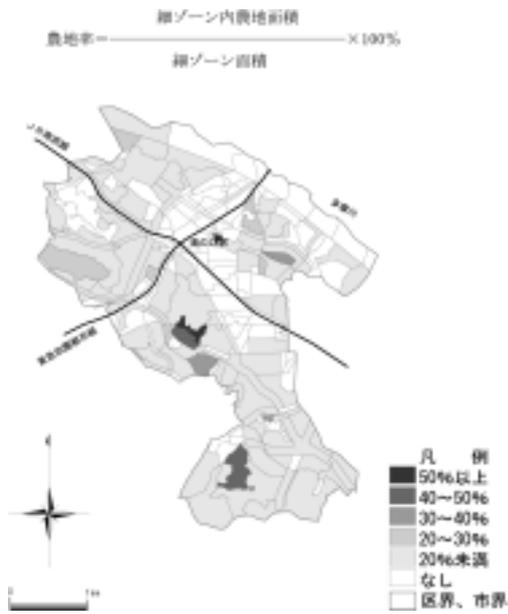
- ・高津区の面積は 17.10k m²で、その土地利用面積の構成をみると、住宅系土地利用の割合が最も多く全体の約 35%となっています。全市平均と比べると住宅系土地利用、農地、山林等の割合が高く、工業系土地利用、商業系土地利用の割合が低いという特徴があります。
- ・用途別に土地利用率をみると、農地は区内の広い地域に点在しています。特に、久末、末長、新作、北見方で、農地面積の割合が高くなっています。
- ・商業系土地利用は溝口などの駅周辺や主要な道路沿いに集積がみられます。
- ・工業系土地利用は下野毛、宇奈根、久地等で中小規模の工場の集積がみられます。
- ・これらを除く地区は、住宅系土地利用が多くを占めています。

土地利用の構成率



(平成 13 年都市計画基礎調査より)

農地率図



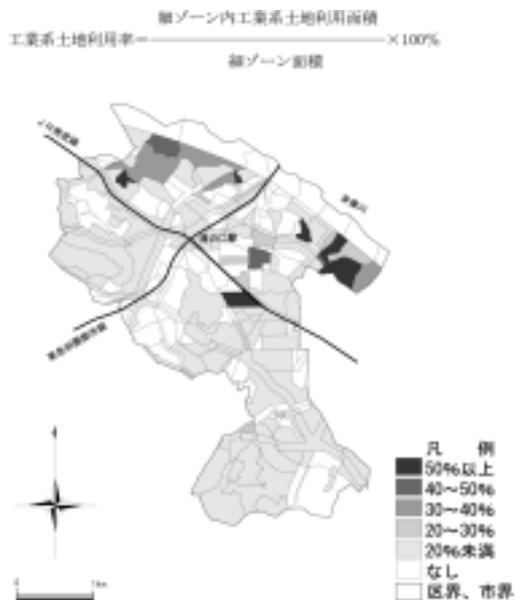
(平成 13 年都市計画基礎調査より)

商業用地率図



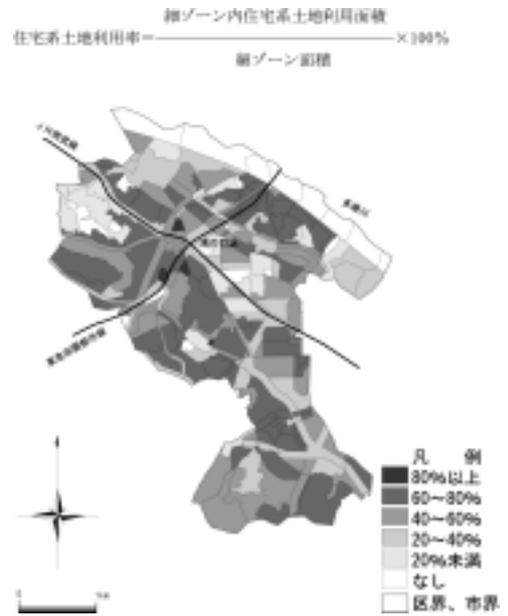
(平成 13 年都市計画基礎調査より)

工業用地率図



(平成 13 年都市計画基礎調査より)

住宅用地率図

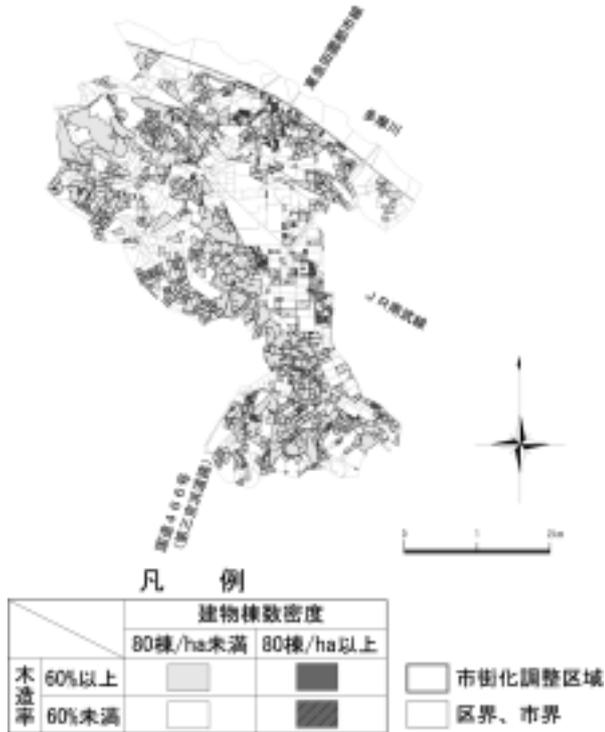


(平成 13 年都市計画基礎調査より)

5 住環境

- ・諏訪や二子などの一部の地域に、木造率 60%以上、かつ建物密度 80 棟/ha 以上の木造住宅が密集する地区が集まっています。
- ・下野毛、二子、久地、宇奈根等の一部には、住工併存市街地が分布しています。
- ・面的市街地整備がなされないまま市街化が進んだ多くの地区で、狭あい道路に面して多数の住宅が建築されています。

木造密集市街地図



(平成 13 年都市計画基礎調査より)

住工併存市街地図



(平成 13 年都市計画基礎調査より)

道路網図



（平成 13 年都市計画基礎調査より）